

宗教修行者たちを捉えてきたが、ヒンドゥー性やイスラーム性、またはその他の宗教的要素の混交する霊的世界という本書の視座は、研究者の参照枠それ自体への鋭い批判と再検討の必要を喚起するものであろう。

本書は、ベンガルの宗教世界への入り口を提供するとともに、その深い底脈へ通じるための、さまざまな示唆や問いを投げかける。既存の閉じられた「宗教」概念を問い直し、聖者廟・聖者信仰という多様な宗教世界のありようを通して、そこに反映される現実の矛盾のはざまで葛藤する人びとの「苦悩」と向き合おうとする著者の姿勢に、評者は深い共感を覚えるとともに、それらをいかにリアリティーとして表しうるのかという、民族誌（あるいは著者が別著で強調する「民俗誌」）的記述の問題を考えざるをえない。他者の苦悩を、書く者が自らの置かれる苦悩の場に照らし合わせながら、相互に了解しうるものとして、描き出すことができるのだろうか。霊的世界とそこに映し出されるひとりひとりの苦悩の民族誌的（民俗誌的）記述という問題がどのように展開されるのか、評者自身の自覚と抱負も併せつつ、外川氏の今後の研究に期待したい。

参考文献

- 関根康正 2000「生活世界の信仰から見直すコミュニズム現象——チェンナイ（マドラス）市における 1994～98 年の参与観察と聞き書きを中心に」『東洋文化』80, pp.1-76.
- デュモン, ルイ 2001『ホモ・ヒエラルキクス——カースト体系とその意味』田中雅一・渡辺公三（訳）みすず書房.
- 外川昌彦 2003『ヒンドゥー女神と村落社会——インド・ベンガル地方の宗教民俗誌』風響社.
- 2005「バングラデシュのマイズバンドル教団における血縁的系譜と霊的系譜」赤堀雅幸・東長靖・堀川徹（編）『イスラームの神秘主義と聖者信仰』東京大学出版会, pp.63-136.
- 2006「シンクレティズム論再考——南アジアの聖者信仰におけるヒンドゥー教とイスラーム」『宗教研究』80(1), pp.25-43.
- 三尾稔 2000「ラージャスターンの一スーフィー聖者廟におけるコミュニズム」『東洋文化』80, pp.139-89.
- 1997「ヒンドゥー・ムスリムアイデンティティーをめぐるミクロポリティクス——インド・ラージャスターン州における聖者廟管理権扮装の事例分析」『東洋英和女学院大学 人文・社会科学論集』12, pp.1-47.

（濱谷真理子 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）

‘Āṭif ‘Adlī al-‘Abd. 2008. *al-Idhā‘a wa al-Tilfīzyūn fī Miṣr: al-Māḍī wa al-Ḥāḍir wa al-Āfāq al-Mustaqbalīya*. al-Qāhira: Dār al-Fikr al-‘Arabī. 272 pp.

エジプトは 19 世紀のナフダ（文芸復興）以来、アラブ文化の中心地である。とりわけ 20 世紀にはいると、映画、ラジオなど通して、アラブ諸国への文化の積極的な輸出地となった。非識字率が高く、口頭でのコミュニケーションが重んじられる伝統を有するアラブ諸国では、エジプトで生産された質の高い映画やラジオ放送が、人びとのかけがえのない娯楽として機能してきた。

こうした文化産業は、つとに指摘されてきたように、特定の理念・利害と無関係ではありえない。

ドブレが述べるように、「想像的なものや知識を中心にすえた文化産業『もまた』、こうした権力の技術」[ドブレ 1999: 145] なのである（『』はドブレによる強調）。エジプトの映画は、エジプトのナショナリズムの形成を促し、1950年代以降のラジオ放送は、エジプトの革命理念をアラブ諸国に伝えるための強力なプロパガンダの装置として機能した。また、1970年代以降に本格的に普及するテレビも、その効果の大きさから、政府が自身のイデオロギーを喧伝するための道具として用いた。今日、自由化が進むプリント・メディアとは対比的に、地上波のテレビ放送はすべて国営放送のままである。

本書は、20世紀のエジプトにおける、ラジオとテレビを対象としたメディア史である。著者であるアーティフは、特に20世紀以降に社会に深く浸透したラジオやテレビなどを対象に、エジプトを中心とするアラブ世界のメディア史や、放送内容の数量的分析を中心とする多くの研究をおこなっている。本書はとりわけ、エジプトでラジオが登場した1920年代から2004年までを対象として、内容の7割をラジオ史の記述に、残りの3割を衛星放送も含めた、テレビ史の記述に割いている。本書の中心的な主題としては、(1) ラジオ・テレビ放送の特徴と、その社会的機能、(2) エジプトにおけるラジオ・テレビ放送の成立史、(3) それらの統括をおこなうエジプト・ラジオ・テレビ機構 (Ittihad al-Idhā'a wa al-Tilfīzyūn al-Miṣrī, Egyptian Radio and Television Union, ERTU) の設立経緯や、メディアをめぐる法制度に関する事柄である。

これまでエジプトのメディア史を扱った欧米の研究としては、ボイドやルフの研究が有名である [Boyd 1982; Rugh 1979; 2004]。ただし、彼らの研究は文化・情報の中心地として機能してきたエジプトのメディア史に多くの頁を割いているものの、アラブ・メディアに関する包括的な記述を目的としているため、一国のメディアについての記述は限定的なものにとどまっている。

しかし、近年のアラブ・メディア研究の進展にともない、特定の国に着目した研究も増えてきており（例えば、エジプトとヨルダンにおけるメディアと法関係を扱ったナッジャールの研究 [Najjar 2008] など）、そうした研究では、対象国における法制度やメディアの成立に関する詳細な歴史的な認識が必要不可欠となる。本書のように一次資料に依拠した手堅いメディア史は、大きな貢献をなすものといえよう。

本書は11章から構成されている。第1章でラジオ、第2章でテレビのメディア的な特性や社会的機能などを概説する。続く第3章から第7章では、ラジオ史および放送内容の具体的な分析がおこなわれる。そして第8章から第11章では、1960年以降のテレビ放送に焦点が当てられ、1990年代以降の衛星放送についても言及がなされる。

第1章では、ラジオのメディア的な特性や、公共意見の形成に果たしうるラジオの役割、およびアラブ諸国およびエジプトのラジオ放送の全体像が素描されている。世界のラジオ受信機数に占めるアラブ諸国のラジオ受信機の割合や、ラジオの視聴者数の変遷、また放送時間全体に占める番組構成などが、具体的なデータとともに示されており、エジプトのラジオ放送の全体像を把握する際に多いに役立つ。

第2章では、テレビのメディア的な特性についての説明と、エジプトにおけるテレビ放送のあらましが簡潔に述べられており、テレビ視聴者数および放送内容などが、11の点にまとめられている。また、テレビが公共意見の形成に果たす役割や、衛星放送の状況についても手際よくまとめられており、第1章と同様、エジプトのテレビ放送の全体像を把握するのに大いに役立つ。

第3章では、ラジオ放送が開始され、私設ラジオ局が乱立した1925年から1934年までの「ラジオ乱立期」が対象として論じられる。エジプトにおける正確なラジオの開始時期は明らかではない

が、著者はいくつかの研究から1926年までにはエジプトでラジオ放送が開始されたと結論づけている。この「ラジオ乱立期」は1934年に政府の規制により幕を閉じるが、著者はこの時期のラジオ放送の状況を、放送局数や放送内容から明らかにしている。

第4章では、1934年から1947年までの「ラジオ整備期」が対象として論じられる。エジプト政府は、国内のラジオ網を普及させるべく、1932年にイギリスのマルコーニ・カンパニーと契約を結んだ。本章では、契約までの経緯や、その後のいきさつなどが詳しく書かれている。また、この時期の放送内容や放送時間についての考察がおこなわれるとともに、「ラジオ乱立期」から政府主導の「ラジオ整備期」へと移行した理由が、当時の社会的・政治的状况とともに明らかにされる。

第5章では、それまでマルコーニ・カンパニー（Marconi Company）を通じて、英国の影響が強かったラジオ放送が「エジプト化」していく1947年から1952年までの時期が論じられる。マルコーニ・カンパニーとの契約が1947年に切れると、エジプト政府は放送内容のエジプト化および放送体制のエジプト化を同時にはかった。その結果、これまでイギリス側の役員に支払われていたコミッションの削減が可能となるとともに、放送内容についての裁量が大幅にエジプト側に移行した。本章ではこうしたプロセスや、「エジプト化」後のラジオ放送をめぐる経営方法や放送資金の獲得方法が詳しく論じられている。

第6章では、1952年の革命から1980年までの時期のラジオ放送が論じられる。この時期に、革命を成功させたナセルらは、その革命の理念であるアラブ社会主義思想を自国民に知らしめると同時に、アラブ諸国へ積極的に輸出していった。本章ではこの時代に開始されたラジオ番組の内容および放送時間の変遷などが論じられる。

第7章では、1980年から今日までのラジオ放送が検討されている。テレビが1970年代以降に急速に普及し、1980年代後半までには多くのエジプト家庭ではテレビの保有が可能となった。その結果、人びとの娯楽はラジオからテレビへと次第に移っていくことになるが、本章ではこの時期のラジオ放送の放送内容および放送時間の変遷が時系列的に描写されている。

第8章以降は、テレビ放送に焦点があてられる。エジプトでは、1960年7月21日にテレビ放送が開始された。当初は、エジプト政府はフランスの企業と契約を結び、国内のテレビ放送を開始する予定であった。しかし、1956年の第2次中東戦争においてフランスが敵国となったため、この案は頓挫した。その後エジプト政府は海外からのオファーを募り、アメリカのアメリカ・ラジオ会社（Radio Corporation of America, RCA）が提示した案がもっともエジプトの要求と一致したため、エジプト政府はこれとの契約を結び、テレビ放送を開始した。本章は、アメリカ・ラジオ会社（RCA）との間に結ばれた契約の内容、また実際にテレビ放送の開始に至るまでの経緯が詳しく述べられている。

第9章では、今日のエジプトのラジオ・テレビの放送を統括する、エジプト・ラジオ・テレビ機構（ERTU）の設立経緯が明らかにされる。政府はテレビ放送の開始を宣言した1959年の時点で、ラジオとテレビ放送の統括を同時におこなう統一機構をつくることを決定していた。だが、実際にエジプト・ラジオ・テレビ機構（ERTU）が設立されるのは1970年であり、本章ではこの間に生じたテレビ・ラジオ放送の監督権をめぐる問題や、実際にその運営に必要な法案の問題などが論じられる。

第10章では、エジプト・ラジオ・テレビ機構（ERTU）のもとでのテレビ放送の運営実態が明らかにされる。とりわけ、テレビ番組の制作マニュアルや、エジプトの8つの地上波放送の来歴、放送形態および番組構成、加えてチャンネルごとの放送時間の変化や、放送資金の獲得の方法について明らかにされる。また、こうした放送環境の変化にともなう、メディア法の変化についても述べられている。

第11章では、アラブ諸国における衛星放送の本格的な普及に先駆けて1990年に開始された、エジプト・スペース・チャンネル (al-Qanāt al-Faḍā'iya al-'Uḷā, Egyptian Space Channel, ESC) が論じられる。エジプト政府は、1990年の湾岸戦争の際、クウェートに派兵した自国兵士を対象に衛星放送からの番組提供をおこなった。本章では、主にエジプト・スペース・チャンネル (ESC) の開設にいたるまでの経緯、放送内容、放送時間などについての、詳しい説明がおこなわれている。

このエジプト・スペース・チャンネル (ESC) の誕生に端を発したアラブ諸国の衛星放送の急速な普及は、英米圏におけるアラブ・メディア研究の進展を促すものとなった。このような研究の進展にとともに、近年では、初期のアラブ・メディア全般を対象とする概説的な研究から、メディアと文化的・社会的状況との間の動態を調べるなど、より対象を限定するかたちでアラブ・メディア研究が進んでいる。そうしたなかで、エジプトのメディア史を詳細に論じた本書が、今後のエジプトを対象とするメディア研究の進展に寄与するところはきわめて大きいものと考えられる。そのように評価できる理由として、ここでは特に以下の2点を挙げておきたい。

1点目は、エジプトにおけるラジオ・テレビの放送内容や放送時間の変遷が、時系列的に整理されて提示されていることである。本書は、ラジオとテレビの放送時期が、それぞれ5つ(1925～34年、1934～47年、1947～52年、1952～80年、1980年以降)と2つ(1960～90年、1990年以降)に区切られ、それぞれの時期の放送内容についての個別的な検討がおこなわれている。これにより、今日に至るまでの放送内容の変遷が明らかとなるとともに、どの時期にどのような番組が放送されはじめたのかが明らかとなり、各時代のメディア状況を政治的状況と重ね合わせて詳しく論じていくことが可能となっている。こうした視点は、ルフ [Rugh 1979; 2004] の共時的なアラブ・メディアの類型論を批判して、より通時的な視点と各時代の社会的背景を強調したアラブ・メディア類型論を主張するアブドゥッラフマーンの「テーマ的類型 (thematic typology)」[Mellor 2005: 69] と通じるものがあるものの、アラブ・メディアという大きな対象ではなく、エジプトという一国のメディアを対象としている点でアブドゥッラフマーンのモデルよりも学問的な厳密性が高い (アブドゥッラフマーンの説は、メロー [Mellor 2005] が端的にまとめている)。

第2には、特に1934年以降のラジオやテレビ放送の運営をする際の、番組制作マニュアルや放送規制等の公的文書が具体的に記されている点である。例えば、1934年のラジオの公共放送に先駆けて、エジプト政府とイギリスのマルコーニ・カンパニーとの間に結ばれた契約内容 (第4章) や、ラジオ放送の監督権を定める1949年の法98条の具体的な内容 (第5章)、またラジオとテレビ放送の番組製作マニュアル (第10章) などが細かく示されている。一般に、英米圏におけるアラブ・メディア研究の多くは、メディアをめぐる法や契約の存在について言及しているものの、具体的な契約内容や番組制作マニュアルを、一次資料から明らかにしたものは皆無である。したがって、本書を通してラジオとテレビ番組の政策が実際にどのような法的規制の上におこなわれてきたのかが明らかになることで、今後特にアラブ・メディアの特徴といわれる「自己検閲」の問題や、ジャーナリストをめぐる諸々の問題が、これまで以上に深い洞察のもとに明らかにされることが可能となるものと考えられる。

参考文献

- ドブレ, レジス 1999 『メディアロジー宣言』西垣通 (監訳) NTT 出版.
- Boyd, D. 1982. *Broadcasting in the Arab World: A Survey of the Electronic Media in the Middle East*. Iowa: Iowa State University Press.

- Mellor, Noha. 2005. *The Making of Arab News*. Lanham, MD: Rowman & Littlefield Publishers.
- Najjar, O. A. 2008. "Media Policy and Law in Egypt and Jordan: Continuities and Changes," in Kai Hafez ed., *Arab Media: Power and Weakness*, New York: The Continuum International Publishing Group, pp.217–233.
- Rugh, William A. 1979. *The Arab Press: News Media and Political Process in the Arab World*. Syracuse, New York: Syracuse University Press.
- . 2004. *Arab Mass Media: Newspapers, Radio, and Television in Arab Politics*. Westport, Connecticut: Praeger.

(千葉 悠志 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)